

3校合同姉妹校調印式の夕宴



私どもは、1986年（昭和61年）3月13日、IADRがワシントンD.C.で開催中、在米スイス大使館において、スイス大使の立ち会いのもとに、日本歯科大学、ミシガン大学、ベルン大学の3校合同の姉妹校の調印式を挙行了。本学とベルン、ミシガンとベルンが、おのおの姉妹校提携の署名をした。

その夜、市内のレストラン。スイス大使夫妻を招いて、3校関係者の夕食会を催した。和気あいあいとした夕宴であったが、一刻、険しいムードが漂った。

私の右にベルンのハンス・グラフ教授、左に同じくニコラス・P・ラング教授が座った。そのとき私はまだ、補綴学教授のラングが、歯周病学のハンスのポストを切望しており、二人は犬猿の仲であることを知らなかった。本学とベルンの姉妹校提携を進めたのはハンスであり、IADRの折に在米スイス大使館で調印するという、奇抜なアイデアを実現させたのも彼であった。

席上、ハンスが私の専攻を尋ねたので、少々ためらいながら、「歯科医学史です」と答えた。すると横からラングが、「信じられない！」と奇声をあげた。思わずハンスが、スイス・ジャーマンで彼をたしなめた。私の専攻が歯科医学史と聞くと、不審がる人は少なくない。のちに、タイのチェンマイ大学歯学部長と昼食の時、同じ返事をするると彼は絶句したあと、「貴方は歯科医師ですか!？」と真顔で問い返された。彼らは、歯科医師なのに臨床をやらず、愚らぬ歴史などやっていて勿体ない、というのだ。

その通りなのだろうが、私は、臨床をやらない歯科医師がいても良いと思っている。それでも、新潟の「医の博物館」を見学した幾人かは、「貴方の専攻が、歯科医学史という意味が分かりました」と共感の握手を求めてきた。博物館の陳列ケースを見て、「まあ！ なんてフォシャールの原本が、ここにあるの!？」と、パリ第7大学の女性教授は金切声

をあげた。近代歯科医学の父と謳われるフランスのP. フォシャールだが、パリでも、こんなに初版等の原本が揃っている所はないという。

斯く、温故知新の大切さを理解する人は少ない。近年、私の研究は歯科人類学にシフトしているので、「歯科人類学です」というと皆さん一様に興味を示す。アンソロポロジーのほうが納得していただけるので、最近では歯科医学史は封印している。

夕宴にもどるが、私は、本学の『歯学』についてタドタドしく説明した。わが国ではすべての歯学部が学術誌を刊行しているが、欧米では歯学部だけの紀要を持っている所は稀である。むろんベルンにはないから、ラングはイラッときたのだろう。「日本語でしょ?」と冷やかなので、論文のアブストラクトをまとめた英文誌『The Journal of the N.D.U』があると話す。すると彼は、「メッドラインに載った雑誌しか読まない」と豪語し、「インパクト・ファクターのない雑誌は認めない」と言い捨てた。私は無然となったが、メッドラインとインパクト・ファクターという言葉が、針刺すように耳に残った。

写真は、険悪になる前の一カットである。左から3人目がミシガン大学のR.L. クリスチャンセン歯学部長 (Dick), その手前がラング, その向いがハンス, 彼の右は古屋英毅教授, スイス大使, 小林義典教授である。ラングは、大柄で髭 (口ひげ) 鬚 (あごひげ) 面で声が大きい。後ろを向いている私は45歳, まだメタボではない。まあ、ハンスと親しい私へのハツ当たりなのだが、四半世紀におよぶ国際活動のなかで、こんなに露骨に反感を持たれたことはない。

のちに、ハンスは病いに倒れ、彼のあとラングは待望の歯周病学の教授になった。馬力のある研究者であったから、歯周病学の先生方であれば彼の名前は知っているだろう。

ラングの暴言から10年ほど経って、わが国にも国際化の波が押し寄せてきた。学術の世界では、IFという十字架が高々と揚げられ、IFに非ざれば研究に非ずという勢いで学界を席卷した。私は、あの

ときラングが誇示した言葉だ、と合点がいった。

このIF至上主義の奔流に焦り、私は、3ヶ月間悩みに悩んだ末、2000年に本学の「研究改革2000」を提唱した。その要訣は邦文誌『歯学』を廃し、英文誌『Odontology』を刊行することであった。歯学会は翌2001年に『Odontology』を発刊し、日本を発信基地とする最初の国際歯科医学雑誌が生まれた。

早くも2003年にはMedlineに収録され、2006年 Science Citation Index Expandedに収録、2009年に1.8という予期した以上のIFが付いた。これにより翌年には、それまで30編ほどであった投稿論文が、一挙に150編の5倍に急増し、私たちはIFの偉力を思い知らされた。大学研究者からは「快挙」と称賛されたが、結局、IFを獲得するのに10年かかった。

数年前、『Odontology』の初代編集長であった筒井健機教授が、「あのとき決断していなかったらと思うと、ゾッとします」と述懐し、私も心底から同感した。今でも邦文誌を廃止した歯学部はなく、自画自賛になるが、本学の『Odontology』がトップランナーとして独走している。

実は、ベルンとの調印の9ヶ月前の6月、私と小倉英夫助教授 (当時) は、姉妹校行脚に欧州を巡った。ミシガン大学のDickの勧めで、私どもはハンス・グラフ教授を訪れた。ベルンはスイスの首都、中世を想わせる美しい街である。彼は待ち兼ねていたように、にこやかに力強く握手を求めてきた。一見して、東洋ジャポネ好きの優れた国際人であった。私たちは、1時間ほど親しく話し合った。実は、次に訪問するチューリッヒ大学歯学部が、私たちの姉妹校提携の本命であった。Dickから聞いてハンスは、そのことを知っていた。

別れ際、ドアを出たところで、ハンスの一言が飛んできた。「Hey! チューリッヒとやるなよ」彼のイントネーションは、親しみをこめた、しかし真剣な声であった。私たちは、たった1時間で旧知の仲になっていたのだ。その時、ベルン大学との提携が決まったと言ってよい。

(写真撮影：小倉英夫〈当時〉助教授)